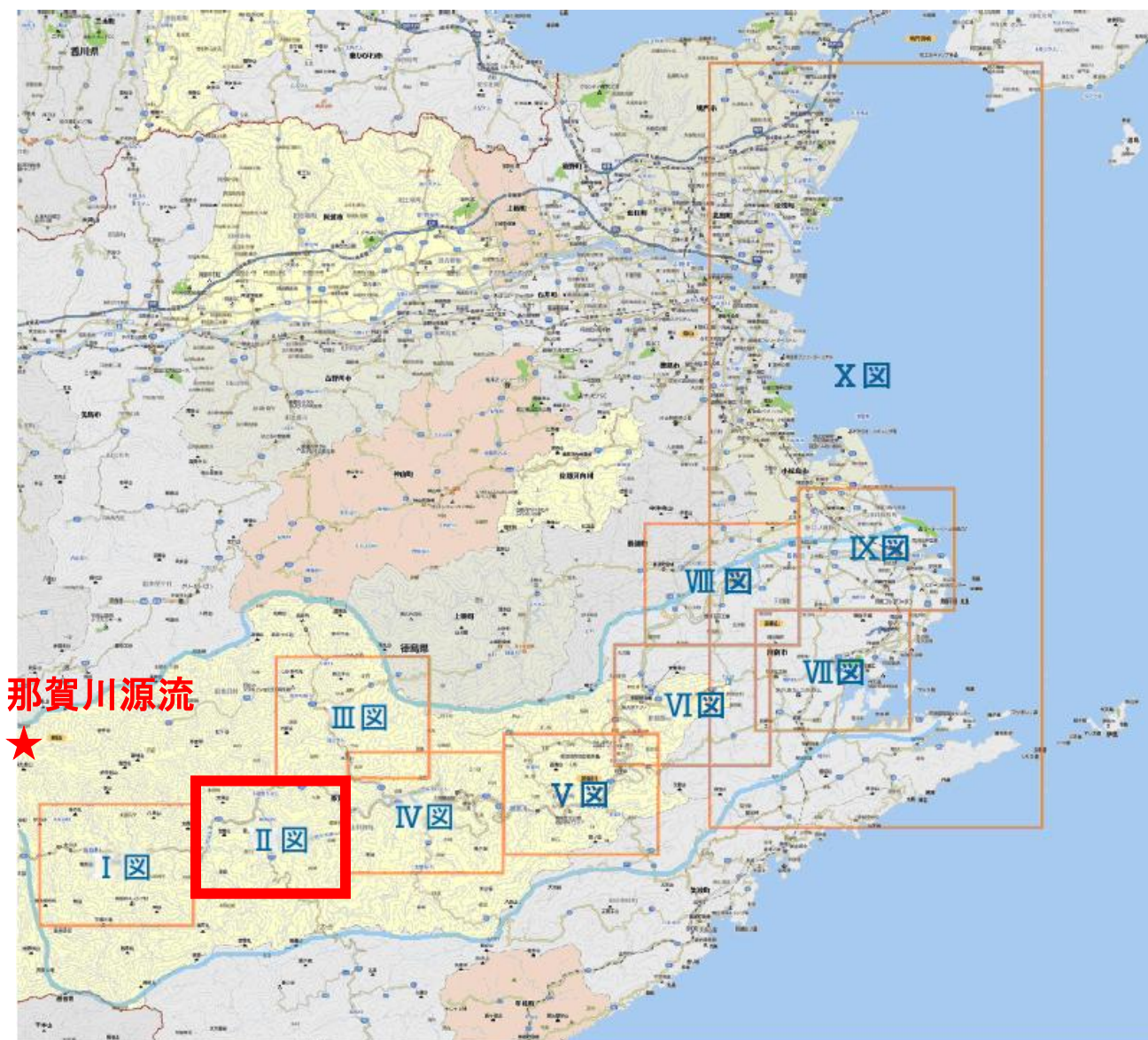


那賀川の風土を巡り訪ねる

第2号

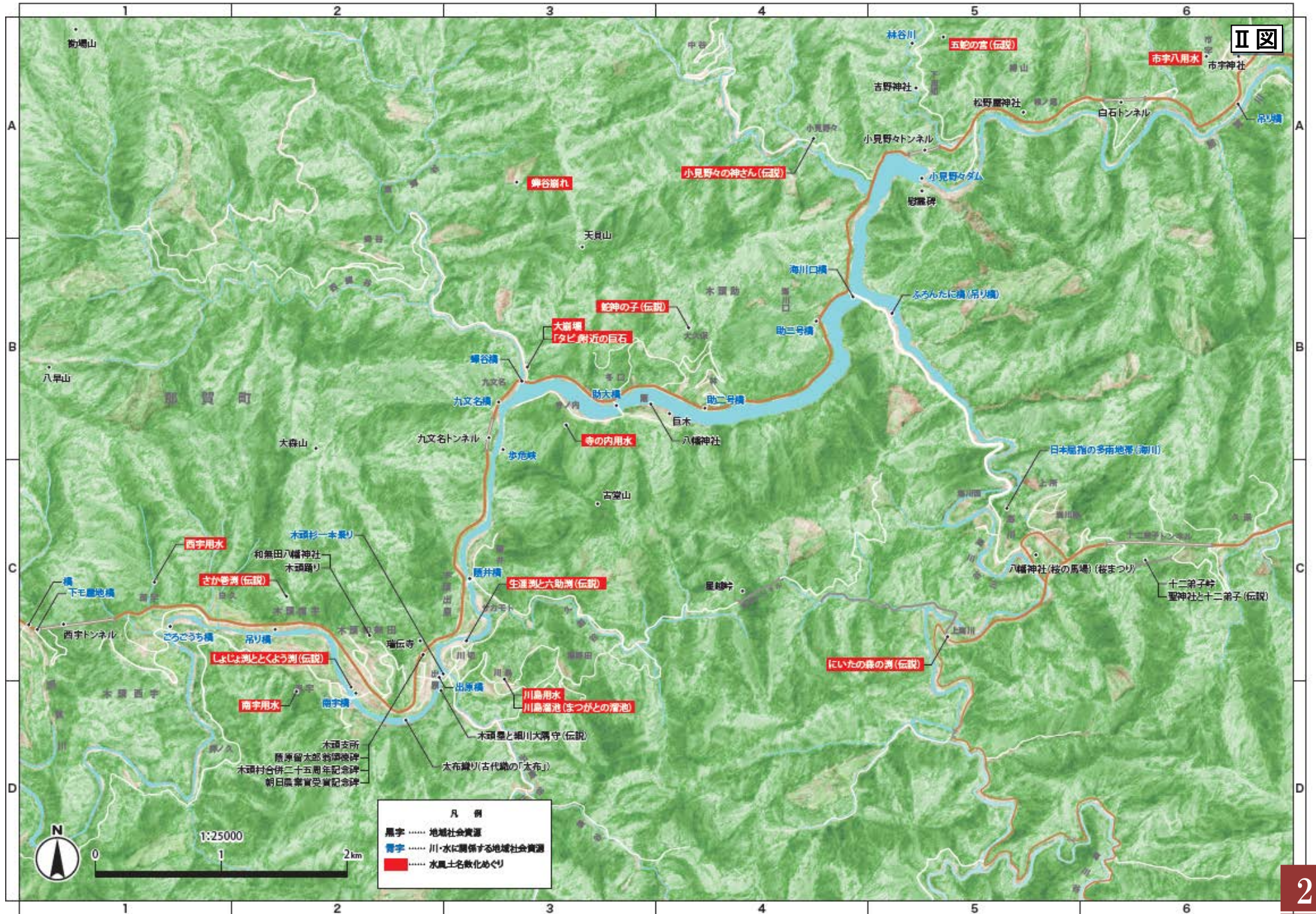


ゆきから那賀川推進会議



図番号	タイトル
I 図	那賀川上流と高の瀬峡
II 図	杉とユズの里・木頭
III 図	坂州木頭川と名瀑の里
IV 図	長安ロダムと高磯山の崩壊
V 図	大蛇伝説と瀬淵の物語
VI 図	仁宇谷の歴史と鷲敷ライン
VII 図	桑野川流域と津峯山
VIII 図	那賀川・水害の記憶
IX 図	那賀川河口と治水・利水の跡を訪ねる
X 図	徳島の海岸津波の伝説

第2章 杉とユズの里・木頭



第2章

杉とユズの里・木頭

◇日本屈指の多雨地帯 Ⅱ 図 C5 一日の降水量日本一を記録

那賀川流域は、太平洋上の強い台風の影響を受け、集中的に記録的な大雨が降ります。那賀川流域の年間降雨量は、上流部が 3000 mm を越える日本有数の多雨地帯です。

旧上那賀町海川で 2004 年（平成 16 年）8 月 1 日に観測された 1317mm は、一日の降水量日本一です。それ以前の日本記録も、木頭村日早の 1114 mm（1976 年 9 月 11 日）でした。



海川集落周辺

◇木頭杉と筏流し Ⅱ 図 C2 多雨地域で育まれた良質な杉

木頭杉は、肥よくな土壌と温暖多雨の気象条件に恵まれ、素直な特徴を持ち、良質な建築用材として知られています。伐り出された杉は、かつては那賀川の筏流しによって下流へと運ばれました。材木は一旦谷川に放り込まれ、大水が出るのを待つか、谷川を人口的にせき止め（鉄砲堰など）、一気に流す方法で運ばれました。また途中点々と石などに掛かった材木を外すため、鳶を持って材木に乗って下る「一本乗り」も行われました。現在では、木頭杉一本乗り大会がイベントとして開催されています。



木頭杉一本乗り



木頭ゆず

◇木頭ゆず 日本一の品質を誇る木頭のゆず

昭和 53 年に朝日農業賞を受賞した日本一の品質を誇る木頭ゆずは、県内出荷量一位であり、全国的にも徳島県のゆず出荷量は 1、2 位を誇っています。降水量が多く、寒暖の差が大きい気候が甘みある香りゆたかな美味しい柚子を育てます。

◇歩危峡

Ⅱ 図 B3

崩れやすい崖を配する峡谷

古堂山の北麓を迂回して流れる那賀川の約2 kmに及ぶ峡谷です。青く深みをたたえた清澄な瀨、奇岩を縫う激流と、変化に富んだ景観で知られています。春は兩岸を彩る白ツツジ、夏は深緑、秋は紅葉が美しい渓谷です。「ホキ」は崖崩れを意味する地名用語で、崩れやすい崖を意味しています。



歩危峡

◇蟬谷崩れ

Ⅱ 図 A3

東蟬谷の右岸にある崩壊地です。これは昭和40年9月の台風23・24号に伴う降雨によって生じました。航空写真によれば、滑落した土石は溪流の中心部を、一部は小さな枝尾根をのりこえて流下しています。東蟬谷への合流点では、対岸にのし上げるまでの土石の堆積によって東蟬谷が一時堰止められました。このときの長安口ダムにおける降雨量は、9月10日～20日間の総雨量が1360mm、最多日雨量333mm（9月16日）最多1時間雨量54mm（同日14時）を記録しました。



蟬谷

【那賀川コラム】

阿波は「波の始まり」を意味している

「阿波」の「阿」の字は、物事の始まりを示す重要な文字です。言葉の始まりは、「あ・A」で、神社、仏閣にある「こま犬」や「仁王像」が表す、阿吽（あうん）〈最初と最後〉の「阿」です。口を開けた方が「阿」で始まりを表し、吐（は）〈息のこと〉です。ですから、阿波の文字は「波が、始まったところ」を意味しています。では「何の波」でしょうか。そのことは、古事記などの古い書物が「日本の文化は、阿波から広がった」と明確に伝えてくれています。けれども、古くから阿波の意味を知らずに「阿波、阿波」と使い続けてきました。

阿波という文字は、阿波から日本文化の波が始まったことを示していたのです。

◇十二弟子峠

Ⅱ 図 C6

血の池にまつわる峠名の由来

昔、土佐の国にひとりの大工の棟梁がいました。この棟梁は腕がたつのでたくさんの弟子がいましたが、仕事には非常に厳しい人でした。ある日のこと、阿波の国から大きい仕事を頼まれ、12人の弟子を連れて、四ツ足峠を越え木頭の南川までやってきたときのことで、池のほとりで腰をおろして休憩をしている時、一人の弟子が、「あんな厳しい棟梁、怪我でもして死んだらええのに」というと、まわりの弟子たちも「そうだ、こんな所では誰にも見つかりはしない、いっそのこと……」と言い出し、とうとう棟梁を殺して池の中へ投げ込みました。すると池は真っ赤に染まり、未だに赤色をしているそうです。弟子たちは、その場を逃げて山を下り、海川にきたとき、不思議なことに12人の弟子は腹痛をおこして、全員死んでしまいました。これをあわれに思った村人は、12人の弟子をこの峠に手厚く葬りました。それからこの峠は「十二弟子峠」と呼ばれるようになったとのことです。



十二弟子峠(トンネル)

【那賀川コラム】

さか巻湊の伝説

Ⅱ 図 C2

湊の底の洞窟に大蛇が住む

南宇の西の前の那賀川に「さか巻湊」があります。那賀川本流の西の前の瀬が南宇側の岩壁にうけとめられて、逆流して渦を作っているところです。

この湊の底には大きな洞窟があって、大蛇が棲んでいるので恐ろしい所で近寄るといわれていました。昔は、田植え前に一番の働き手である牛を川へ連れて行って、洗い清めてやる習慣がありました。ある年、農家の方がさか巻湊の上流で牛を洗っていると、凄い力で牛が湊の方へ引っぱられ流れて湊の上で見えなくなりました。その人はびっくりして飛んで帰り、隣近所の人と探しに行きましたが、死骸も見えませんでした。その年の夏、牛のいなくなった場所の近くの稲田の稲が三尺幅でおしとおされていて、蛇の悪臭があったそうです。

◇市宇八用水

Ⅱ 図 A6

水の不便な地に引かれた八つの用水

昔から市宇部落は水の不便な所で、用水路も多く東谷上（引地）用水・中用水・下用水・下込用水・溝谷用水・鳥砂用水・上中内用水・蔭平用水と八か所の用水路があって、毎年四月～五月頃には各戸から出夫して、赤土を掘り用水路に運び木槌をもって、たたきつけ補修しており、相当な労力を費やしていました。



市宇部落

◇にいたの森の淵

Ⅱ 図 C5

淵に渦巻く平家貴人の首

上海川の上流、にいたの森とよばれる所に大きい淵があります。昔、その淵に生首が流され渦をまいていました。平家の落人が貴い方の首を敵に奪われまいと持って逃げてきたものの、奥山険しく持ちきれなくなって、この淵に投げ込んだものであろうと伝えられています。



にいたの森の淵

◇五蛇の宮

Ⅱ 図 A5

山の大蛇を5つに切り5つの祠へ祀る

野久保の奥に「五蛇の宮」という神様をまつてあります。むかし、一人の猟師が、山で蛇に出合っのまれかかりました。蛇と格闘の末、やっとこれを殺すことが出来ました。ところが、その頃のいい伝えとして、蛇を殺すと、その蛇の一部分でも食わないと、たたといわれていました。猟師は蛇を食うのは気味がわるいし、たたられては大変なので、その大蛇を五つに切って埋め、五つの祠を作って祀りました。それで五蛇の宮というのだそうです。

◇蛇神の子

Ⅱ 図 B4

蛇神の化身だった青年

助大久保のある家に美しい娘さんがいました。その娘さんの所へ、毎晩のように美男の青年が通っていました。そのうちに娘さんのおなかが大きくなって子供が生まれました。ところが生れた子供は、たらいに七杯もあって、人間の子ではありませんでした。娘は勿論、親達もびっくりして子供をふりおとすと、釜の淵（釜磯の淵）へ流れていきました。青年は蛇神の化身であったのです。

◇木頭の用水・溜池

村内に作られた 15 用水・5 溜池

・ 寺の内用水

寺の内用水は、同部落の古富要人が中心となり、梶田喜久太・後藤駒蔵等の協力によって明治十三年に完成しました。戸数の少ないこの部落では、資金不足が一番の悩みでした。白石村の富豪八田家へ借金にいきましたが、古富だけでは埒があかず、梶田・後藤両名の引受によってようやく 400 円を借りることが出来ました。

ところが資金は出来たものの用地の問題で、蔭部落民の猛烈な反対にあって苦しみ、2 年の歳月を費して、ようやく完成しています。当時、寺内には一坪の田もなかったのに、一町六反の水田を作ったのは、小部落としては大変な工事でした。開田希望反別に応じて出資金を割当てたため、水田ほしさに資産の大半を投じた者もあったそうです。

・ 川島溜池と用水

溜池は、明治三十一年の着工で、完成は明治四十二年四月です。この溜池の築造については、豊原勘平の尽力によるところが多いといわれています。この頃、川島にあった約二反歩の水田は、黒田部落の余りに水に頼っていたので、毎年のように水不足に悩まされていました。

溜池を作れば水不足どころか、新田開発の可能な点に着目した豊原のすすめによって、平川記八氏ほか二、三の有志が中心になって着工しました。この辺一帯は赤土地帯なので、水洩の心配はあるまいと底部だけ締めておいたところ、水洩れが多く、後に堤上部を締めなおすことになりました。

溜池完成後も、取入用水路が長く、労力の割に水不足は解消されませんでした。

昭和二十一年、食糧増産の声に応じて、用水路ならびに農道補助金によって、現用水の工事に取りかかりました。昭和二十一年十一月着工、農道 650m は翌年三月末に完成したが、問題はトンネル工事でした。

食糧事情から、専門家を雇うことも出来ず、着手当時の労賃 30 円は 50 円にもはね上り、トンネル工事未着手のまま、部落内に動揺の色が見える状態でした。しかし、窮すれば通ずの喩の通り、大正初年、中川家の祖父留吉氏がホキ滝で満庵鉞採掘に使用したノミやフィゴに目をつけて、自力でやろうという方針が決まりました。

中川氏がダイナマイトを用意して工事にかかったのは、六月下旬、田植開けのことでした。中野正・中川雅晴兩名は、旧盆まで二カ月間、青の洞門式にこつこつと掘り続けました。盆過ぎから田中・井村・瀬戸本氏も加わって、十一月末には、約半分に近い 20m 程掘り進みました。

ついで、十二月一日の祭の後、工事委員会を開き、部落を四班に分け、各班五日宛の交替作業を決定しました。こうして翌昭和二十三年一月末に貫通したのです。その後継続で、セメント工事を完成し、最初の目的を達したのは、昭和二十四年でした。しかし、用水を作ったための崩壊や、昭和二十八年には風水害を受けて苦しみ、二回にわたる補助金も全額補壁工事に投入し、部落民は一戸当十人役以上の労務を提供しなければなりませんでした。

昭和三十三年度、久則谷からモーターによる揚水工事に着工、よけの・坂本両用水の水利権者と分水協定を結んで全工事が完了するまでには、昭和二十一年から前後 12 年間を費しました。

この工事の完了によって新田 70a が増加し、従来からあった黒田・川島分合わせて計 2.7ha 外、なお、川島では約 50a 開田しても水不足の恐れはない見込となりました。



川島東溜池

・ 南宇用水（通称拝の久用水）

昭和十七年着工・昭和十九年まで2年の日時を費やして完成しました。当時は労力・物資ともに極めて不自由な太平洋戦争中のことで、当事者は一方ならぬ苦心をしました。しかし、関係者の尽力によって、用水補助金の外に林道補助・開田補助・災害復旧補助等各種の補助金総額が、工事費の半額以上に達したこと、ならびに共有財産の処分によって、各自の負担金が案外軽くなったのが、本工事を完成した主な原因です。

・ 西宇用水

西宇用水の中で立尾谷用水は、寛延二年（一七四九年）に、長七・与吉郎両名の協力によって作られました。但し最初の計画は長七であったためめ事が起り、分水協定を結んでいます。

その他、屋地谷用水、北野用水もありますが、詳細はわかっていません。

・ 平野用水

蔭谷から引いていた古用水（年代不詳）は、延長1里8町（約5km）に達し、水田総面積2.7町歩しかない部落としては、毎年の用水普請が一苦勞でした。反当7～8人役の出役は、少家族の家では、半分以上人雇いをしなければならず大変なもの入りでした。

昭和七年、西宇坂トンネルの竣工した翌年、同部落の中山正義・株田福美氏等が中心となったのが、現在の本流から引いている用水です。総工費2400円、半額補助金の計画で取りかかりましたが、工事半に請負業者のブラジル行きが決ったため、工事未完成のままに放置され、2年を費やしてやっと完成しました。請負金の残金500円ではたらず、追加補助金600円は得たものの、この時は補助相当の出役を負担しなければなりません。また、当初の地元負担金の償還も、不況のどん底のこととて、決して楽ではありませんでした。

◇ しよじよ淵ととくよう淵

II 図 D2

庄蔵と徳蔵

南宇橋の下にある淵は、むかし、庄蔵という人が溺死したことから、庄蔵がなまって「しよじよ淵」となりました。

南宇の「シショウデ」と呼ばれるすぐ上流に「とくよう淵」というのがあります。あまり大きい淵ではありませんが、昔のままの姿を保っています。昔、徳蔵という子供がここで溺死したので、「とくぞう」がなまって「とくよう淵」と呼ばれています。川底は蟻地獄のようになっていて、足を踏み込むとずるずると引き込まれてしまいます。

◇生涯淵と六助淵

Ⅱ 図 D3

身寄りもない不遇な老夫婦が身投げした淵

明治の初め頃、川切ミヤノウシロに老夫婦が住んでいました。婆さんは両眼失明で、爺さんは片方の目がみえず、そのうえ子供もなくまた身寄りの者もない不遇な家庭で、近所の人情けで日々を過ごしていました。ところが年と共に自分達の生涯を案じて夫婦相談したのでしょう、ある月夜の晩、人の寝静まるのを待って暗い道を夫婦手を取り合って、提灯の明かりでコンヤ谷口の磯の平らな所へきて、携えてきたささやかな料理でこの世の別れの食事をした後、二人は何処までも離れないように縄で堅く結びあい、袂には小石をいれて水中に身投げしました。それからこの淵を「生涯淵」と呼ぶようになりました。

このすぐ下流には「六助淵」があります。その昔、出原の「ヨケノ」に六助という悪者が住んでいて、通行人の金品を略奪したり、あらゆる悪事をはたらくので、人々は避けて通ったので「ヨケノ」と呼んでいました。

これを何時までも放置しておけないので、村の若者たちが相談して、殺すより外に手段なしと決まりました。決行日は雨で、ドブ酒をもって集まり酒盛りとなりました。六助は酒豪でしたが呑み過ぎたのか、身動きできないぐらいに酔っぱらいました。さあこれでよし、川も洪水になってきたので、三人程で抱き上げて、それいけとかけ声共に前の淵へ投げ込みました。如何に水練に達者でも増水しているし、岸が絶壁のためはい上がることもできず六助は流れ去りました。それからこの淵は「六助淵」の名がつけられました。通行に心配はなくなりましたが、以後長年の間に淵の周辺で水難事故があり、六助の祟りじゃといい出す人もいて、世話人が相談の上瑞伝寺の住職に申し出ると、流灌頂の供養をするように教えられ、定められた日に部落の人たちも供養に参加して一心に祈った結果、それ以来不思議に周辺の水難事故はなくなりました。

【那賀川コラム】

千引の岩（紅葉川上流）

Ⅴ 図 A2

記紀に書かれた巨岩か？

イザナミを追って黄泉国の比婆山へ会いに行ったイザナギは、「見てはいけない」と言われた妻の醜い亡骸を見たためイザナミ達に追われるはめとなった。亡霊となった妻イザナミが追いかけてきたので、千人が引くような大岩で道を塞いだと『日本書紀』や『古事記』に書かれています。周囲に点在する神社や地名などに記紀に関連するものが多々あることから、この巨岩はこの「千引の岩」ではないかといわれています。



千引の岩

ゆきかう那賀川推進会議事務局

国土交通省 四国地方整備局

那賀川河川事務所

徳島県 県土整備部

阿南市

那賀町